［別紙２］

審査の結果の要旨

氏名　千葉有

本研究は、半側空間無視の症状の定量的な評価法を作成し、その有効性を検証することを目的とした。また、半側空間無視の原因の仮説の検証をも行っている。作成された評価法は動画を使って自動化した受動的線分二等分試験である。評価は右向きタスクと左向きタスクの２つのサブタスクに分けて行われた。同方法を用いて、半側空間無視の患者19名と、対照としての健常者21名に検査を行い、下記の結果を得ている。

1. 患者群において、健常者群に比べて有意に大きな偏りが検出された。意図的な手の動きを排している条件下で偏りが検出されたため、この偏りは感覚無視の症状を反映すると考えられ、UNの原因としての感覚無視の仮説群が真であると考えられた。
2. 患者群は、右向きタスクよりも左向きタスクにおいてより大きな偏りを示した。この原因は、左向きタスクにおいてより注意の左方移動を必要するためと考えられた。左向きタスクにおいて、患者はより大きな右よりの偏りを示す傾向にあり、より高率に患者の右よりの偏りを検出できる。検出される偏りには注意の左方移動障害のバイアスをより含んでいると考えられた。一方、右向きタスクにおいては、患者が示す右への偏りは左向きタスクより減少する傾向を示し、患者の右よ

りの偏りを検出できる確立は減る。しかし、感覚の（知覚の）無視をより純粋に評価できると考えられた

3. より注意の左方移動を必要とすると考えられる左向きタスクにおいて、患者群がより大きな偏りを示したことは、感覚無視の原因としての注視障害説を支持する結果と考えられた。一方で、双方のタスクの結果において大きな違いの無い患者も存在し、知覚障害説を支持する結果と考えられた。感覚無視の原因が注意あるいは知覚のどちらかのみの障害ではなく、それぞれが独立しており、双方が共に原因となりうる可能性が考えられた。

4. 双方のタスクにおいて、感覚無視ありと診断された患者の中に、前頭葉又は深部構造にのみ病巣がある患者も存在し、それらの病巣も感覚無視の原因となりうることが示された。

5. 左向きタスクにおいて右向きタスクよりもより大きな偏りを示した患者は、注意の左方移動が傷害されていると考えられ、注意の無視がある可能性があると考えられた。一方で双方なタスクの結果において大きな差が無い患者は知覚の無視が主である可能性が考えられた。感覚無視の症状がさらに亜型に分類されうる可能性が示唆された。

以上、本論文において、動画を用いて自動化した受動的線分二等分試験が、半側空間無視の症状の評価法として有効であることが示された。本方法による検査結果は、半側空間無視のリハビリテーションにおいて、有効な訓練プログラムを計画するために有用である可能性があり、臨床において重要な貢献をなすと考えられ、学位に値するものと考えられる。